



「朝鮮戦争の年に生まれて半世紀あまり経たひとりの『在日』二世が、何を失い、何を獲得しえたのか、そのことを忘れえぬ人々の記憶とともに書き留めておくこと」

初の自伝のモチーフを著者はこう説明する。熊本に生まれ、現在東大教授の職に就き、テレビ、新聞等で論陣を張る著者は、今や時代の人となった感さもある。だがこの書は、朝鮮と日本とのほごまで揺れ動き続けた著者が、一人の人間として、一世である親や過去の体験と正面から向き合うことで、自己の原点を再確認することを試みたものだ。

「在日」同胞や家族はもちろん、「日本」を語るときも、行間から温かさかじみ、愛情があふれている。その根底には、廃品回収業を営み、厳しい状況にあっても決して人を見下さなかった両親から学んだ感性があるように思う。ハンセン病療養所・菊池恵楓園で

自伝を超える優れた文学性

の回収も平気でこなし、患者と一緒にご飯を食べ、鍋をつつき、家に呼び入れることも多かったという。

そんな著者に大きな転機が訪れるのは、講義に失望し、図書館にこもっていた大学時代だ。自分の死と引き換えに抑圧者としての日本を告発した、あの金婚老事件を目の当たりにする。たまりたまっていた閉塞感は一挙に限界に達し、ついに韓国の地を踏むことになる。そこで祖母や多くの親族、幼いころの「在日」の集落を思わせる村の風情を肌で感じ、何かがふっきたことで、日本名「永野鉄男」を捨て「姜尚中」で生きる決意をするのだ。メディアになぜ多く出るのか。その理由も明瞭だ。「在日」が、常に朝鮮半島や「在日」の問題だけを話していればいいという偏狭な壁を壊し、イラク戦争や日米関係、日本経済を論じることで、新たな発言権を獲得することに狙いがあると述べる。

喜寿を過ぎ横臥する母が存命のうちに編もうと思ったこの書には、単なる自伝を超えた優れた文学性がある。また「在日」の歴史を学ぶ上でも詳細な下欄解説が目を引き、画期的な書になっている。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）